
I S インフィニット・ストラトス 織斑 一夏と千冬の兄

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 織斑 一夏と千冬の兄

【Nコード】

N2532X

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

織斑 一夏は織斑 千冬に家族縁を切られ兄の所に住んでいたが平和に暮らしているそんな時に二人は大勢の目の前で

IS起動させてしまう

大学を卒業しているのも関わらず再び高校に通う事に！

だが二人は専用機を持っていた

IS学園でどんな嵐が起こるのか！？

始まり

ピピピpバシ！ボシユン！

目覚ましのやかましい音を叩き消して俺は起きた

コキツゴキゴキツ

今のは手と首の骨を鳴らした音

朝起きたらまずこれをする

俺はベットから降り洗面所に向かう

顔を洗い髪を寝癖を直しキッチンに向かい和食風の朝食を作る

テーブルに作ったご飯を並べコップと箸を並べた

ここまでの作業が終わったのにまだ起きてこない

俺は二階に上がりある部屋に入るそこにはベットで幸せそうな顔で

眠っている弟がいた

今は弟と二人暮らし親はいない

・・・・・・随分と昔の事だ

両親に捨てられて弟は妹と暮らし

俺はそんな二人を助けるために高校に通いながらバイトをしていた

俺は高校に通うために外国にいた

だがそんなある日、日本で妹と暮らしていた弟が顔に傷を作り体中

に痣や怪我をした状態で俺の元に知り合いである叔父さんと一緒に

来た

理由を聞くと弟はかなり勉強が出来それで虐められ相手を殴っても

いないのに殴られたと

先生に言いつけられ妹に散々怒られ自分が正しいことを言っている

にも拘らず殴ってきて

拳句の果てに

「お前は私の弟でも家族でもない！」

と言われたらしい

そのため弟はちょうど俺のいる国に行く用が会った叔父さんに頼み込み

連れて来て貰ったらしい

弟は俺と一緒に居たい あの家には戻りたくない！

つと言つて来たので一緒に暮らしている

それが何年も前の事だ

弟の希望もあり苗字も俺の同じ 希望にした

俺は親戚に引き取られこの姓になった

その親戚も俺が引き取られて直ぐに死んだがな

名前は一夏のままにした

理由は俺がその名前がいい名前だと昔に言つたからだ

さていい加減に起こすか

「起きろ、一夏」

「わにゅ？あれ？アクセル？」

「誰が地球連邦軍特別任務実行部隊特殊処理班の隊長だ」

「ごめん・・・お兄ちゃん・・・寝ぼけてた・・・」

「かまわんホラ顔洗つて来い朝ごはんにするぞ」

「解つたよベーオウルフ」

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊ベーオウルブズ隊長だ」

「だつてお兄ちゃんの名前恭介じゃん？」

「アインスケと一緒にするな」

そんな悪ふざけも混ぜながら一夏は洗面所に行った

俺はリビングでご飯を盛る

ご飯は温かいほうが良いからな

ほどなくして普段着に着替えた一夏が着た

「では今日も」

「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます」

どっかで聞いた事があるかもしれないが気にしないでくれ
いつもど通りの朝

味噌汁を吸い焼き魚を食べご飯を食べる

うむ・・・卵焼きは美味しくできたな

・・・

「ご馳走様でした」

食べ終わったら食器を片付け洗い拭き食器棚に入れる

「一夏、いよいよだ」

「うん・・・でもごめん俺がISなんかに触ったせいでお兄ちゃんに
また高校に行かせることになって・・・」

「気にするな、だけど問題は・・・」

「織斑 千冬」

かつて妹であった人物

一夏を拒絶し家族縁を切った女

そいつがいるIS学園で教師をやっている

それが問題だ

俺達の容姿はかなり変わってはいるがな

一夏は背が高く髪も白銀となり織斑 一夏には全く見えない

俺も長かった髪を切りショートヘアにして今までは家族の前でも
していた

カラーコンタクトを外し本来の目の色 青と緑のオッドアイに戻した
千冬が知っている俺達と今の俺達はかけ離れている

「さあて行くか？」

「うん」

「ヴァイス持ったか？」

「うん持ったよお兄ちゃんは？」

「俺がアルト忘れると思うか？」

「嫌ないね」

「だろ？」

俺達は家を出てIS学園に向かった

何これ？予想してけどパンダじゃないぞ？

「ではSHRを始めますそれでは皆さん1年間宜しくお願いします」
「」「」「」「」

山田先生が挨拶をするが皆無視

「え〜と・・・では自己紹介をお願いします・・・」

なんか・・・涙目になってる・・・

「ではお次は・・・希望 一夏君お願いします」

「はい希望 一夏です 趣味は読書と音楽鑑賞です」

「」「キ・・・」「」

「き？」

「」「」「キヤアアアアア〜！！！！」「」「」

！？びつくりしたあ・・・

「男！美形！！」

「優しい感じ！！！！」

「私とつきあつてえ〜！」

一夏人気だな

次は俺か

「希望 恭介だ 大学を卒業したんだがISに触ったためにまた高校からやり直す事になった

皆より年上だが気軽話しかけてもらえると助かる 趣味は料理にお

菓子作りに読書に機械弄りだ」

「きゃあ〜!!!年上!!!」

「ああ!地球に生まれてよかった!」

「クール系!カッコいい!!!」

「お兄様!!!」

この後千冬の一喝で静まりSHRは終わった
だが一夏は落ちつかないようだ

「落ち着かない・・・」

「まあパンダ状態だな俺達」

廊下にも大量に女子がいる

「はあ・・・お兄ちゃん」

「なんだ?」

「鎮圧してきてよ狼さん」

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊ベィオウルブズ隊長だってかこれ朝も言っただぞ」

二人のIS

俺と一夏は授業を受け休み時間にこれからについての事を話していた

一番の問題は織斑 千冬

見た目からばれる心配はない

だが一夏の幼馴染もいる

ばれない様にしなければならぬ

「ちょっとよろしくて?」

「ん?」

「なんだ?」

髪がロールヘアの女の子が話しかけてきた

「まあ!なんですよ!そのお返事は?」

わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

8

「確か・・・イギリスの代表候補生セシリア・オルコット」

「あらそちらの方は知っていますね?」

「ああだが邪魔だ今は一夏とISについて話をしているんだ」

「ISのことでわからないことがあれば、まあ教えて差し上げてもよろしくてよ?」

私は入試で唯一教官を倒したのですから

「入試ってISつけて戦うやつ?」

「それ以外に入試などありませんわ」

「それなら俺も倒したぞ?」

「え?」

「俺もだ」

「勝ったのは私だけと聞きましたが？」
「女の中でだろう」

その後チャームが鳴りセリシアは去っていった

その後何故か勝負する事になりまず一夏が戦う事になった
すでにセリシアはアリーナにいる

「遊んでくるよ」

「ほどほどにな」

一夏はかけていたペンダントを展開し

長い銃、悪魔のような翼を持った

所々に赤い宝石のような物が付いた全身装甲のISフルスキン

そして俺が作り上げ一夏の相棒となったライン・ヴァイスリッター
となった

「ではライン・ヴァイスリッター 希望 一夏！行きます！」

一夏は敵に向かっていった

「一夏君！きみの・・・IS・・・」

山田先生と千冬がやってきた

「なにやってんですか？弟ならもうIS持ってますよ」

「え！？（何！？）」

二人はアリーナのほうを見ると一夏がセシリア・オルコットと向かい合っていた

「な、なんだ！あのISは!？」

「全身装甲のISなんて・・・」

「あれが一夏のISライン・ヴァイスリッター」

「ライン・ヴァイスリッター・・・純白の騎士・・・」

「（さあてあの代表候補生が一夏の相手になるか見物だな）」

一夏は戦闘を開始的の攻撃を持ち味である圧倒的な機動性で避けていく

「な・・・なんて速さだ・・・」

「ま、まるで分身しているみたい・・・」

「・・・やれやれ遊んでるな一夏の奴」

「「え!?(何?)」」

俺の目には遊んでいるようにしか見えない

「私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい!!」

・・・ブルー・ティアーズ一夏に襲い掛かるが全くあたらない柔らかな動きで回避してく

「いい加減に攻撃したらどうだ?」

独り言を言うと一夏が攻めに転じた

ハウリング・ランチャーEモードで攻撃を始める

だがその攻撃はヴァイスが超高速で動いているためまるで

何十機ものヴァイスが射撃を行っているかのように

避けようとするがブルー・ティアーズも破壊されなおも砲撃をやめない

どんどんシールドエネルギーを削っていく

一夏は接近しハウリング・ランチャーBモードを直撃させ後ろを取り

「わおおおくん!!」

と言う声と共に三発打ち込みシールドエネルギーを0にした

試合終了勝者 希望 一夏

一夏はヴァイスをペンダントに戻し俺の元に来た

「イエイ！」

「遊びすぎだ」

パアアン！

と言いながらハイタッチに応じる

「次は俺か」

「お兄ちゃん」

「ん？」

「遊び過ぎないように」

「説得力に欠けるな」

俺は指輪の状態のアルトを展開する

赤く頭部に角を持ち

肩には大型のコンテナのようなものがあり

左腕には5連式チェーニングガン

右腕にはリボルディング・バンカー

腰にはライフルと刀

重武装なIS

俺の相棒アルトアイゼン・リーゼだ

「！？また全身装甲！？」

「じゃ行つて来る」

「いてらく」

「アルトアイゼン・リーゼ、希望 恭介出る！」

一気にスラスターを吹かす

そこではセリシアが待っていた

「あら逃げたのかと思いましたが」

「一夏に良い所見せんと兄として示しがつかんからな」

「それにしても・・・二人とも全身装甲・・・」

「準備はいいか？」

「はいいつでも」

セリシアはスターライトmkIEIEIを放ちアルトに直撃するが
エネルギーも減ることなく無傷

「なんですと！？」

「・・・」

俺は無造作に接近しバンカーを4発打ち込み

至近距離でチエーンガンを撃った

当然全弾命中あつという間にエネルギー残量0

試合終了勝者 希望 恭介

俺はアルトを待機状態に戻し一夏の元に向かった

「遊ばなかったね」

「あれで遊べというほうが無理だ弱すぎる」

「つていうか先手必勝？」

主人公設定

希望 恭介

年齢 23

身長 209cm

体重 89?

容姿 オツドアイのキョウスケ・ナンブ

今作の主人公 一夏と千冬の兄でありより高みを目指すため外国の高校にバイトをしながら通っていた

以前は弟と妹と暮らしていたが親戚に引き取られ希望 恭介となる
幼い時からカラーコンタクトを付けオツドアイという事を家族にも隠していた

ある時顔に傷を作り体中に痣や怪我をした状態で弟である一夏が来て
千冬に縁を切られたということを伝えられ一緒に暮らしている

以前から一夏とISを動かせる事ができ自らIS

ライン・ヴァイスリッター アルトアイゼン・リーゼを開発した
大学を卒業し一夏の入試に付き添い近くにサンプルとして置いたあ
ったISに

一夏と共に誤って触ってしまい起動させししまう
そのため再び高校からやり直す羽目になる

一夏同様に織斑 千冬激しく嫌悪、憎んでいる
だがISの生みの親である篠ノ之 束もある出来事から異常なほど
憎しみを抱いている

ペンダントには写真を入れている

希望 一夏

年齢 17

身長 197cm

体重 75?

今作のもう一人の主人公

元は織斑 千冬と姉弟関係があつたが学校で相手を殴つてもいないのに

殴られたと相手が先生にいい付けられ千冬に暴力を振られ家族縁を切られ

全治5週間の怪我を負わされ兄である恭介が滞在している国に行く叔父に頼み

恭介の元に行き一緒に生活を始める

この時に千冬に縁を切られたため恭介を引き取つた親戚の姓 希望に姓を変える

性格は基本的には優しく調子に乗りやすい

だが千冬に対しては絶対零度の態度で接する

恭介の力になりたいと恭介の開発したIS ライン・ヴァイスリッターの所有者となる

千冬と束個人の事を途轍もなく憎んでおり憎悪しか感じていない

束を憎んでいるのは自分が慕っていた姉と言える存在を殺されたからただ個人を憎んでいるので家族などは憎しみの対象外

「そう・・・此処にいる希望　一夏は織斑　一夏だ　そして俺は織斑　恭介・・・」

「!?!?!?!?!?きよ、恭兄?　一夏?」

「あれ?もう家族じゃなかったんじゃないの?織斑　千冬?」

一夏の目は絶対零度の眼だった

「そ、それは・・・あの時は・・・」

「言いすぎたって言いたいだったらいいよ僕が怒ってるのは縁を切られて

全身ボロボロにされて全快するのに5週間かかってお兄ちゃんに余計な世話掛けさせちゃったんだから」

まあ病院行って入院させて時間があつたらにお見舞い行っただけだけだな

「・・・」

「もう僕は貴方と関わりたくないから」

そう言い残して部屋を出て行った

俺と千冬は向かい合っていた

「・・・なんであんな事を言った・・・」

俺は口を開いた

「それは・・・一夏が嘘を言い完全に自分の過ちを認めなかったからです・・・あのくらい言っておけば

次は大丈夫だと思ったからです・・・」

「・・・本気か?アイツの心のことも考える馬鹿者が

アイツは本気で悲しんで精神崩壊を起こさなかったのが不思議なくらいだった
お前は相手の事を考える　そして・・・俺は何処まで行ってもアイツの味方だ」

そう言い残し俺はベットに入った

飛行訓練

今は授業中

あの後千冬が出て行き一夏が帰ってきてたら

幼馴染の篝ちゃんを連れてきた

どうやら彼女は俺達の正体に最初から感ずいていたらしい

その後一夏が話し完全に昔の関係に戻ったらしい

にしてもこんな可愛い子が近くににいるのに無反応とは鈍感だな・・・

「これより飛行訓練を開始する 希望兄弟、オルコット飛んでみせろ」

俺と一夏は0.05秒で展開する

セリシアも俺達の及ばないが速い展開だった

「よし、飛べ」

俺達は飛んだがアルトとヴァイスのスピードは尋常ではないためセリシアを追い抜いてあっという間に200メートルに着いた

「お早いですね恭介さん」

「まあ性能の差だな」

「まあお兄ちゃんは万能だからね」

「そうなんですか」

「煽てるな、セリシアすまんが今度俺に付き合ってくれんか？」

「え！！？つつつ、付き合うつて／／／／」

「すまん言い方が悪かったな、訓練の相手になってくれんか？」

「そついう事ですか・・・ふ、ふたりきりなら・・・／／／／／／」

「すまん」

『急降下と完全停止をやってみせる目標は地表から十センチだ』
「では恭介さん、一夏さんお先に行きます」

セリシアは一足に降下し急停止した9cmってどこか

「じゃあお先にいくから」

一夏は一気に加速し1cmの所で停止した

「さて行くか」

いったん上昇し1500の地点で一気に急降下する

とんでもないスピードを出し地面にぶつかりそうなところで急停止
地面まで0.01センチ危うく地面にファーストを捧げる所だった

・
・

IS設定

アルトアイゼン・リーゼ

武装

スプリットミサイル

中射程ミサイル

煙幕やジャミング様々な使い道がある

5連チエーンガン

左腕に装備された連装機関砲で、牽制用の実体弾兵器

3連マシンキャノンよりも小口径だが装弾数や有効射程、速射性能が向上している

近距離の発射で高威力を発揮する

プラズマホーン

頭部ブレード

始動時に電撃がホーンに発生する

緊急用の武器としてだけでなく、障害物の除去にも使用できる

リボルビング・バンカー

右腕に装備された大口径ステーク

アヴァランチ・クレイモア

火薬入りのチタン弾M180A3を使用し、装弾数も増加した
因みにアヴァランチは「雪崩」の意味

ビームライフル

アルトのアキレス腱である遠距離への攻撃を補う武装

ライン・ヴァイスのハウリング・ランチャーを開発するに当たってこのライフルを基にした

アルト専用試作零式斬艦刀

恭介が自身が剣術を使うためそのポテンシャルを最大限に引き出す剣形状記憶型の液体金属で作られており機体からエネルギーを供給する事で

技に応じた形状及び大きさに変化・形状固定する

試作のため改良の余地あり

恭介が一夏と暮らし始め一夏を守るために設計、開発したIS

同時期にライン・ヴァイスリッターも開発しコンビを組ませ戦う事を考えていた

機体コンセプトは『絶対的な火力をもって正面突破』

装甲はエネルギーを流すことで圧倒的な硬度を誇る

更にアンチビームコーティングが施されている

コアには恭介が開発した次世代のエンジンが複数搭載されている

そのため火力、加速力、防御力は全IS中でトップを誇る

恭介との相性は抜群で驚異的な戦闘能力を発揮する

ライン・ヴァイスリッター

武装

スプリットミサイル

アルトの物と同一

3連ビームキャノン

ハウリング・ランチャーの死角を補う

ハウリング・ランチャー

実弾とビームの撃ち分け可能な武器

底部には尾のような形状のパーツが接続されている

実弾発射機構自体はオクスタン・ランチャーとさほど変わってはいない

ビーム発射機構は大きく変貌を遂げており、Xモードを起動すると銃身先端が変形し

獣の顎の中に3本の口径の異なる砲身が出現し高出力ビームを撃つ

ヴァイス専用日本刀

ヴァイス専用の刀

ヴァイスの接近戦を可能とする武装

斬艦刀と比べると小型で扱いやすいがパワーでは劣る

ビームを弾き返す事も可能

恭介によってアルトと同時期に開発されたIS

機体コンセプトは『亜音速で飛行することによって敵の攻撃をことごとく回避し

その長距離兵器を駆使して超々距離から敵中枢に打撃を与える』

当時は恭介が乗り分ける予定だったが一夏の強い希望により一夏のISとなる

一夏は持ち前のセンスによりあつという間に乗りこなし今では恭介との

コンビネーション技もできるようになった

装甲は厚くはないが持ち前のスピードで攻撃をかわす

攻撃を当てることは難しい

アルト同様にコアには次世代のエンジンが複数搭載されており

機動性では全ISの中でトップに輝く

火力ではアルトに劣る

クラス代表生 織斑 一夏？否、我は希望 一夏

「一組のクラス代表は織斑君に決定いたしました！」

パチパチパチパチ

クラスの女子から拍手を浴びる一夏

「あれ？お兄ちゃんやらないの？」

「ああお前はまだ青い経験を積んだほうがいい」

「あれで青いのか？恭介お兄さん？」

篝ちゃんが尋ねてきた

「ああこいつはまだまだ未熟者だ、剣もな剣のほうは篝ちゃんに任せるよ」

「ええ！？」

「（ほら練習で一夏で良い所見せれば好感度アップできるぞ？）」

「（うう／＼／＼そうですかね？）」

「（ああ俺もサポートするがアイツは鈍感だからな）」

「（わ、わかりました／＼／＼い、一夏！剣は私が相手をする！覚悟しろ！）」

「解ったよっていうかお兄ちゃん面倒なだけなんじゃないの？べーオウルフ」

ボコッ！

「誰が地球連邦軍特殊鎮圧部隊べーオウルブズ隊長だ、いい加減にしろ」

「うう……ごめんなさい……」

「だってえ〜感じ出るじゃん？」
「いい加減にしろ」

俺が注意しようと思ったたら織斑 千冬が一夏に注意した

「・・・僕は貴方に注意される義理はありませんよ織斑 千冬」

「先生と呼べ」

「断る」

「!？」

「僕は既に織斑という呪縛から解き放れている存在 希望 一夏だ」

「・・・（強がるな一夏、慢心は見えるものを見えなくする）」

「（解ってるよお兄ちゃん）」

俺と一夏はお互いの意思共有がISを通して可能

「お前は・・・紛れもなく織斑だ・・・」

「「「「え!?織斑!？」「「「「」

篝ちゃんを除き周りは驚いている

「・・・織斑?否、我は希望 一夏」

「!?!」

「お兄ちゃん、僕は先に部屋に戻ってるから」

「ああ」

短く言葉を交わし一夏は部屋に戻る

織斑 千冬は呆気を取られた顔をしている・・・滑稽だな

「俺ももう織斑 恭介ではない 希望 一夏の兄 希望 恭介だ
千冬・・・もうお前の兄ではない・・・」

「!?!??そ、そんな・・・」

「一夏の苦しみを考えてみる・・・織斑 千冬・・・
お前との兄妹との縁もここまでだ」

「!?!?!」

俺はかつて千冬が一夏に言ったのと同じ意味の事を言う
織斑 千冬は立ち上がりそのまま何所かに去っていった
俺も部屋に向かい歩き始めた
廊下で俺は口を開く

「織斑 千冬・・・俺はお前を許さん・・・肉親に縁を切られた一
夏の苦しみ味わえ・・・」

俺はそのまま部屋に入った
一夏は既にベットに入り眠っていた
幸せそうな顔をして

「・・・お前は俺が守ってやる、お前が一人前になるまでな
それからは自分の足で腕で意思を持って決める・・・ぐっ!」

突然激痛が走る
俺は声を殺し胸を押さえる

「クツ・・・古傷が・・・」

奴を倒すために受けた傷
忌まわしい過去

あの時から俺は人間ではなかったのかもしれない

「・・・お前は今の俺を見たらどう思う?」

窓から外を見ながら呟く

中国からの一夏の幼馴染登場

俺は席で自前のパソコンを叩き斬艦刀のチェックを始めた
試作斬艦刀は途轍もないパワーを秘めている

俺の剣術に耐えるために頑丈にしておく必要がある
ISのブレードでも俺の剣術には耐えられなかった
そのために開発したのが斬艦刀だ
因みに俺が使うのは示現流

「お兄ちゃんどう？斬艦刀は？」

「ああいい感じだ、まだ使ってみないと解らんがなそれと転校生が
来るらしいぞ」

「転校生？」

「ああしかも中国の代表候補生らしいぞ」

「中国か・・・」

一夏は何かを思い出すような顔をする

「セリシアと同じってことだね」

「その通りですわ」

「ちよつと不安かなクラス代表戦」

一夏は不安そうな顔をする

「大丈夫だよ一夏君！専用機持つてるのは私達1組と4組だけだか
ら」

「その情報古いよ」

クラスの入り口で仁王立ちする少女がいる

「あれ？あの子……」

「もしかして……鈴？」

「……アンタもしかして一夏？」

「やっぱり鈴ちゃんか」

「え！？そういうあなたは恭お兄さん!？」

「ああそうだよっていうか早く自分のクラスに戻ったほうが良いよ」

「え？それってどういうkバシン!?!」

鈴の頭に織斑 千冬の出席簿が炸裂した

「さっさと自分のクラスに戻らんか」

「は、はい……」

頭を抑えて鈴は去っていった

時間は過ぎて昼食時

「お兄ちゃん学食行こうよ」

「そうだな」

一夏と共に食堂に向かった

そこには

「待ってたわよ！一夏、恭お兄さん！」

目の前に鈴が現れた

「待ってたの？っていうかラーメンのびるよ？」

「あんた達が遅いからよ！」

とりあえず食事を持ってテーブルに付く

「にして何年ぶりだろうね」

「最後に会ったのは・・・5年ほど前だな」

「本当お久しぶりです恭お兄さん、髪短くしたんですね」

「ああ」

「お似合いですよ、一夏は髪染めたの？」

「いや色々あってね」

「ふ〜ん・・・あ！そつだ恭お兄さん」

「ん？」

「彼女とはうまくいってますか？」

「「！！！！」」

声は大きくなかったため他の生徒には聞こえてはいない

「・・・あまあな・・・」

「そつですか」

「・・・お兄ちゃん・・・」

一夏は心配そつに俺を見る

「気にするな一夏・・・昔の事だ」

俺は食器を片付け残りの授業に専念した

俺は授業が終つたら部屋に戻りベットに腰掛、外を見る

「・・・」

唯無言でひたすら外を見る

そして掛けていたペンダントを開き写真を見る

そこには俺の腕に腕を絡ませ一夏の頭に手を置き笑顔でいる女性
その写真の俺は今では決して見せない笑みを浮かべ

一夏の肩に手を乗せている

一夏は満面の笑みを浮かべている

「・・・本当にお前にはもう会えないだよな・・・」

俺は気付かぬうちに涙を流していた

「・・・すまん・・・俺のせいで・・・うっ・・・」

声を殺し俺は泣いた

ひたすら誰かに謝るように泣いた

中国からの一夏の幼馴染登場（後書き）

いつたい恭介のペンダントに入っていた写真の女性はいつたい！？
更なる謎が現れ加速する物語

恭介は何故謝っていたのか！？

恭介の身体に刻まれた古傷を引き換えに倒した敵とは！？

恭介の心には何が映るのか！？

恭介の憎しみ

さて今俺は観戦席に座り一夏の試合を眺めている

相手は中国の代表候補生 凰 鈴音

パワー型の甲龍と機動性重視のヴァイス面白い試合だ

最初はお互いの剣で切り合いをし

その直後に一夏は距離をとり得意な距離まで後退した

がそれを読んでいたのか肩のアンロック・ユニットが開き球体が光る
目には見えない攻撃にも一夏はまるで見えるかのように避けていく

「(さて行くかな?)」

「何故疑問系?」

ISを通して一夏の考えが頭に入ってくる

「わお〜ん!と、ハウリング・ランチャー、いってみましょか!」

一夏はお得意の超高速移動での射撃を開始する

パワー型のだけに機動性は低くあまり避けられてはいない

一夏はBモード攻撃しようと思ったそのとき!

黒煙が上がり爆発が起きる

そしてモニターにもう2機のISが見えた

俺はそいつを見たときに怒りに包まれた

それは織斑 千冬の専用機白騎士に酷似していた

俺は許可も取らずにアルトを展開しアリーナの遮断シールドに向かい

「撃ち込む!」

リボルディング・バンカーを撃ち込む進入した

そこでは一夏が鈴を庇い必死に攻撃を避けていた

「くっそ！」

ハウリング・ランチャーEモードで攻撃をするが狙いが甘く避けられる

すかさず敵に接近し斬管刀を引き抜き応戦する

ギン！ギャギン！ギンン！

激しい剣の鏝迫り合い

「うおおお！！！」

一瞬の隙を突き敵を一刀両断にする

「我が斬艦刀に、断てぬものなし！」

俺はもう1機に向かい合う

こいつら・・・無人機だな・・・

「お兄ちゃん！」

一夏は俺に問いかける

「一夏・・・お前は邪魔だ・・・引くんだ・・・」

「わかった・・・よ」

一夏は自分も戦いたいと言う顔をするが大人しく引く

「・・・よりによって白騎士とはな・・・」

あの時・・・お前と束のせいで・・・アイツは・・・」

「なら戻るつよ？ね？」

「あ、ああ……」

俺は一夏に肩を貸してもらい部屋に戻った

途中で千冬とあったが無視し部屋に戻り俺は眠りに付いた

恭介と一夏の過去

僕はベツトに寝ているお兄ちゃんを椅子に座ってみている

「お兄ちゃん……」

僕だって白騎士は途轍ないぐらい憎いさ

でもあんな所で憎しみを爆発させる事はないよ……

お兄ちゃんが言っていたアイツとはお兄ちゃんの家に住た時に

僕に優しくしてくれてお姉ちゃんと呼んでいた人の事だ

コンコンッ

あれ？誰だろう？

僕がドアを開けるとセリシア、箒、鈴、山田先生がいた

「……何のようです僕はお兄ちゃんの看病で忙しいんです」

「一夏、恭お兄さんは？」

「今は眠っているよ」

「あの一夏くん、恭介くんはなんであんなに白騎士を？」

「……話すわけにはいかないね」

「なんでよ!？」

「これは僕たちの過去を話さなきゃいけないんだ」

「だったら話してよ」

「箒……後悔しない？」

「もちろん」

「私もですわ」

「セリシア……解かったよまず入って」

僕は4人を部屋に入れた

「ねえ一夏、あなた達に何があったの？」

鈴が尋ねてきた

「……まず僕達の過去を話さなきゃいけないね」

時は遡る事数年前……

僕は兄さんと暮らし初めて直ぐの事だったよ

僕はまだその国の暮らしにまだ馴染んでいなくて家に閉じこもりがちだったんだ

でもある日お兄ちゃんの家にある人が来たんだ

その人はお兄ちゃんと同じその国最高レベルの高校のクラスメイトだったんだ

僕はその人をとて警戒してたんだ

織斑 千冬の事もあって僕は女の人を警戒してたからね

「おいおい一夏こいつは大丈夫だ、こいつは俺の親友だ」

「本当？」

「ああ」

僕はお兄ちゃん言葉に聞いて僕はその人に近づいたんだ

「宜しくであります」

「あります？」

「ははは、コイツは日本語が巧いんだけど巧くできないところがあるんだ」

「むっ……」

「……あはは改めて宜しくねお姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「お？なんだなんだもうお姉ちゃん呼ばわりか？」

「うっ……」

「わ、私で姉になっても……」

「ほんと！宜しくお姉ちゃん！」

それが僕とその人の出会いだった

その人はなんか日本語変な部分があったんだ

でもその部分が面白くて僕は懐いたんだ

その人は優しくて僕の事をお兄ちゃんと一緒に僕のことを何かと構ってくれたんだ

一緒に海に行ったりピクニックに行ったり沢山の思い出を作ったよ
でもあの日が来たんだ

お兄ちゃんの発案で日本に行ってお姉ちゃんに日本を案内しようってことになったんだ

最初はよかったよ

水族館に行ったり日本食を食べたりお寺に行ったりしたよ
でもね……白騎士事件が起きたんだ……

「で、でも！ミサイルは！」

「ああ白騎士が迎撃した事で有名な事件だ

でもね……白騎士が迎撃し損ねたミサイルが僕達に落ちてきたんだよ」

「……ええ！？」「……」

その人は僕とお兄ちゃんを庇ってミサイルを食らって……

僕たちが気付いたときにお兄ちゃんがお姉ちゃんにプレゼントし黒焦げになった

指輪とペンダントが見つかったんだ

でもお姉ちゃんの姿は何処にもなかった

その後僕たちは必死に探したけど見付からなくて

警察にも言っただけで出したけど見付からなくて色んな病院に回った

けど居なかった

お姉ちゃんは死んぢやったんだ・・・

その時僕はお兄ちゃんにしがみ付いて泣き続けたよ

お兄ちゃんは悲しみを押し殺して僕を抱きしめてくれたよ・・・

ただど夜にお兄ちゃんがリビングでお姉ちゃんと御揃いのペンダントを握り締めて

泣いてたんだよ

お兄ちゃんが泣いてる姿は初めて見たよ

それだけお兄ちゃんにとってお姉ちゃん存在は大きかったんだ

そして白騎士が「ブリュンヒルデ」織斑 千冬だつて事がわかった
さらにお兄ちゃんが全ての人脈を使って2年をかけて白騎士事件を
起こしたのが

ISの生み親 篠ノ之 束だつて事がわかった

そして僕達の目的が決まった

「目的つて何ですか？一夏くん？」

「そこまでだ」

「「「「！？」」「」」」

お兄ちゃんが身体を起こしていた

「もういいだろう、そこまで俺達の目的を教えることはない」

「そうだね話はここまでだよ」

この後4人には帰ってもらった

「いつから？」

「最初からだ、まさか織斑 千冬に縁を切られた事まで話すとはな」

「これで僕があの人を憎んで居る事が解かって貰えるよ」

「まあな・・・だが俺達の目的を話すなよ」

「うん」

「俺達の」「僕達の」

「目的は」

「織斑 千冬及び篠ノ之 束に対する肅清、抹殺」

「それを忘れるなよ」

「うんお姉ちゃんを殺した事を絶対に許さない」

そう僕達の目的はこの二人の死だ

この以外の目的などない

仲間からの連絡

今日は俗に言う休日だ
はつきり言おう

「暇だ・・・」

一夏は筭ちゃんに連れられて何所かに行った
俗に言うデートだな

アイツもいい加減に彼女作れよ
天然一級フラグ建築士が・・・
俺は可能な限り暇を潰している

本を読んだりお菓子作ったりISの点検したりだが暇だ・・・
現在午前10時・・・夜にはまだまだ時間がある・・・
ああ・・・憂鬱だ・・・使い方あつてるか？

ん？このレッドワカメヘアーの着信音は・・・
俺がボタンを押すとスクリーンには赤ワカメがいた

『誰が赤ワカメだ!!』
「誰に言ってる？」

赤ワカメ・・・もといかつて敵同士であったが今は仲間になった
アクセルからだ

「どうした？そっちから掛けてくるなんてどうい風吹き回した
？」

『おいおいいくら住所不定だからってそんな言い方ないだろう？』
「だったらいい加減定住しろ」

『わ〜たよ説教は勘弁してくれ』

「っでなんだ何か用か？」

『用がなきゃ掛けね〜よ、ソウルゲインが完成した』

「やつとか、遅すぎだ」

『わりいな、なにせ武装強化に熱が入ってな』

「あまり無茶をするなよ」

『くくく・・・なっはは！！計画のターゲットがいる学院にいる奴に言われるとはな！』

「・・・説教3時間たっぷりされたいか？」

『それは勘弁だ、でソウルゲインだがよ』

玄武剛弾を衝撃弾にして発射できるようにしてずっと両手が健在の状態にできる

さらに遠距離戦カバーにソードブレイカー付けたぜ』

「なんとというか相変わらず機体の弱点カバーはお手の物だな」

ソウルゲインは素手による格闘戦機とされ

接近戦が主であり遠距離武器は両手の掌に青いエネルギーを収束し

撃ち出す

せいりゅうりん
青龍鱗しかない

だがアクセルは自分が考えた自動誘導可能攻撃ユニット

ソードブレイカーをソウルゲインに装備しアキレス腱を解消した

まったく弱点を補うと言う点ではこいつの右に出る者はいない

『あと直ぐに俺もそっちに行くぜ』

「おい待てお前まさか！ IS学園来る気か！？」

『That'sライ！これがな！！』

「じゃないだろ！このアホセル！」

『俺はもう記憶喪失ではない！！って言うか決定事項だ』

「おい！？」

『グッバイ』

ブツッ

「おい！あんの野郎・・・」

あいつは言い出したら聞かないどうしたいい・・・？
まあ流れに身を任せるか

3人の転校生 蒼い戦神

「お兄ちゃんそれ本当？」

今は夜9時半

昼間にアクセルから連絡が来た事を伝えた

「ああ奴の専用機『EG-Xーソウルゲイン』が完成した」

「でまさか……」

「ああIS学園（こゝろ）に来る」

「マジい？」

「ああできれば？と言いたいかな……」

俺と一夏は同時にため息を吐いて一日が終わった
そして次の日……

「今日は転校生がいます！しかも3人も！」

副担任の山田先生が言い放つと女子たちは騒ぎ始めた
そんな中に転校生が入ってきた
ひとりはめちやくちや見覚えのある赤髪を見て
俺と一夏は手を額に当てた

「シャルル・デュノアです

フランスから来ました 宜しくお願いします」

「お、男？」

「……（お兄ちゃん……デュノアって……）」

「（ああ……彼は……いや彼女だな……）」

「（え……女の子？）」

「（ああ・・・かんだがな）」
「（かんですか・・・）」

意思共通で会話する俺達

「挨拶しろラウラ」

「はい教官」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「了解しましたラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・」

「（ラウラ・・・黒兎か・・・）」

周りは先ほどまでの賑やかさは消えうせしくんとする

「え〜つと以上です・・・か？」

「以上だ」

「（うわ！簡潔！）」

彼女は一夏と目を合わせるなり一夏に近づいてきて殴ろうとするが
アクセルが拳を受け止める

「！」

「おいおいドイツって国は初対面の人を殴るのが挨拶か？」

「貴様・・・」

「おい・・・」

俺は立ち上がりラウラに向き合う

「一夏に弟に手を出すなら俺が相手に出すぞ・・・」

無意識にアルトリングが鈍い光を放っていた

「弟だと？」

「ラウラいい加減にしろ、希望 恭介お前も座れ」

「・・・」

俺は黙って座った

ラウラも一夏からはなれた

「さて最後は俺か、俺の名前はアクセル・アルマーだ
趣味は身体を動かす事だ気軽に話しかけて貰えると助かる」

お決まりパターンでアクセルの女子達の黄色い声を浴びた

「ではHRを終わる各人着替えて第二アリーナに集合
2組と合同でIS模擬戦闘を行う解散！」

千冬が声を上げてHRが終った

「希望兄弟、お前達でアルマーとデュノアの世話をしろ」

「えっと・・・僕はシャルル・デュノアです宜しく」

「宜しく僕は一夏 希望 一夏だよ」

「俺は希望 恭介だ」

「アクセルだ」

「宜しく」

「っというより急いだほうがいい男子はいちいちアリーナの更衣室
で着替えなきゃいかん
ごたつくが慣れてくれ」

「うん」

セリシアと鈴がやられていた
しかもラウラは二人に止めをさそうとしていた
だが俺が一瞬にして間に割り込み素手で攻撃を受け止めた

「なに!？」

「恭介さん？」

「恭お兄さん？」

「やれやれ何をしているラウラ?これ以上やるなら・・・俺が捻り潰すぞ・・・」

俺は殺気を丸出しにしている

「邪魔だ」

「お前がな・・・」

俺は無意識にアルトとは別のISを取り出す
爪などの装飾がされ野生的な印象を受ける

「おいおい恭介の奴あれを使う気か」

「まあしょうがないって奴だよ」

俺は怒りに任せてISを起動させる所だったが
千冬が割り込んできた

「ちっ・・・」

舌打ちをしセリシア達を保険室に連れて行った

「あのまま戦っていたらやばかったな」

保険室で俺は一夏とアクセル、シャルルを連れ、話をしている

「二人ともISのダメージも大きいよ」

「うう・・・」

一夏が珍しく的を射た事を言った

「今失礼な事考えなかった？」

「別に」

ドタドタ・・・

なんか音が聞こえる

ボタン！！

ドアが壊れんばかりの勢いで開いた

そこにクラス中の女子達がいた

「何の騒ぎだ？」

「「「これを！！！」」」

女子達は紙を見せてくる

それをアクセルと一夏は見る

「「え〜つと・・・次回の学年トーナメントをタッグ形式行います

ので生徒同士タッグを組むこと

タッグが組めなかった場合抽選で決定するつと・・・」

「つまり・・・」

「君たちは俺達と組みたいって事？」

勢いよく頭を振る女子達

「悪いな俺達は相手が決まってるんだ」

それを言うと女子たちはガツカリして帰っていった

「まあ本当は決まってるだけだよね」

「あんなに困まれたら決め辛いだろう？」

「まあそうだね」

「で？誰が誰と組むんだ？」

実際そんな事に興味されなかったから俺達3人はシャルルは知らん
すると山田先生が入ってきた

「オルコットさん、凰さん今大丈夫ですか？」

「はい」

「大丈夫です」

「二人のISのダメージレベルがCを超えてしまいました
ISを休ませる意味でも大会には出れませんよ」

「ええ!？」

「そんなあ!?!？」

二人は大きな声を上げ落胆しているようだった
まあ解るがな

「まあ今回はしょうがないさ」

「ああ大人しくしてな」

「「はい・・・」」

声がかかなり小さいが納得してくれたようだ

「それと恭介君と一夏君にはお知らせがあります」

「お知らせ？」

「はい新しく2人男子が入ったので部屋の移動をお願いしたいんです」

「まあしょうがないな」

「うん」

俺と一夏は別に構わない

「そうですか。では一夏くんは1025室になります」

「はい」

「恭介君は変わりませんがデュノア君と同室をお願いします」

「わかりました、宜しくなシャルル」

俺はシャルルに手を差し出した

シャルルは戸惑いながらも握手に応じてくれた

「こ、こちらこそ」

「アルマー君はそのお・・・」

「？」

「私と・・・同室になります／＼」

「・・・マジですか？」

わおアクセルは山田先生と同じ部屋か

この後俺達は部屋に戻り一夏は荷物を持って移動しシャルルが部屋に来た

さて・・・パートナーは誰にお願いしよう？

何で俺まで？（後書き）

ここでアンケートです

恭介のパートナーを募集したいと思います

ひとり3票まで投票は可能です

皆様のご協力お願いいたします

シャルルの真実

「ああ〜風呂入りてえ〜」

「アクセルお前そんなに風呂好きだったか？」

「そう言う訳じゃないが湯船に浸かりたい時があるんだよ」

俺達は更衣室で着替えをしながら雑談を交えていた

シャルルは先に部屋に戻りシャワーを浴びるとか言っていた

「にしても女性と部屋が同じってのは辛いぜ」

「まっ山田先生なだけまじだろっ女子だったら襲われるぞ」

「それはやめてほしいなってか一夏、お前も筈と一緒にだろっ？」

「一夏の場合は相手が幼馴染だからな」

「ちえ一夏少し妬ましいぜ」

「男の嫉妬ほど見苦しいものはないぞ」

「うるせ〜」

着替えを終え互いに自分の部屋に戻る

シャルルはシャワーか・・・

あっそういえばリンスが切れてな

リンスのボトルを持ちシャワールームのドアを開けると

・・・湯気を纏い、タオルを羽織っており胸の部分には膨らみがある

「きゃ！恭介！！？」

「あっ・・・リンスのボトルここに置いとくからな」

「へ？あ、うん・・・」

さっさと用を済ませシャワールームから出る

ベットに腰掛シャルルが出てくるのを待った

そして着替えたシャルルが出てきて俺の隣に座った

「・・・／／／」

「別に話さんでも理由ぐらいは想像出来るが教えてくれんか？
女であるシャルルが男装までして此処にいるのか？」

その後シャルルは真実を話してくれた

デュノア社の命令である事や本妻の子ではない事
様々な事を他人である俺に話してくれた

「今話したことが全てだよ」

シャルルの顔は悲しそうだった

スツ・・・

俺は黙ってシャルルを抱き寄せた

「へ！？ちよ！きよ、恭介！？」

「安心しろお前は一人ではない」

「え？」

「俺と一夏は親の顔さえも知らないし親に捨てられた身だ」

「・・・その・・・」

「一夏の親は俺みたいな物だあまり気にするな

それとシャルルこれからどうする？」

「どうって・・・僕には選ぶ権利は・・・」

「だったら此処に居ろ」

「え？」

「特記事項第二一、

本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組
織・団体に帰属しない

本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されな

いものとする

つと記載されている」

「・・・じゃあ」

「3年間は此処に居れる、味方は俺だけではない
アクセルに一夏もいるしな」

「でも・・・卒業しちゃったら・・・」

「それだったら俺の所に来るか？」

「え!？」

下手をしたらプロポーズにも聞こえる台詞

だが俺は基本的にアイツ以外には興味はない

「家族が一人増えようが変わらんしもしもの時は
デュノア社を粉砕するまでだ」

「恭介だったらそれ本当にやりそうだから怖いんだけど・・・」

「ん?そうか？」

「でも有難うね」

「礼には及ばんよ」

俺はシャルルを解放し部屋を出た

廊下を歩きながら呟いた

「偽善者ぶってんじゃね〜よ俺

俺の目的は復讐だ家族を台無しにした復讐だ

正義なんて要らん目的のためになら俺は悪になろう」

始まる学年トーナメント 恭介&一夏VSアクセル&ラウラ

ついに学年トーナメント当日

俺はと一夏と組む事し

アクセルはなぜかラウラ

アクセルによると相手がいらないという事でかなり一方的に決定され
たらしい

まあ面白そうだな

そして最初の相手は・・・アクセルだよ

決着はここで着けるつもりはないがな

・・・

第一リミッターをかけまくった状態で勝っても嬉しくない

そして俺達は向かい合う

「恭介ここで決着はつけようとは思ってはなげ俺は」

通信で俺に語りかけてくるアクセル

「ああ俺もだ」

「なあどうせならあれみたくやんね？」

「？アインスケ風にか？」

「そうだ」

「まあいいか」

俺達はISを展開する

「一夏、俺はアクセルの相手をするからできるだけだけで良いからラウ
ラを

食い止めてくれるか？」

「うんいいよ」

「サンキュ・・・お前達は・・・望まれない世界を作る・・・」

「え？何言ってるの？」

「（アクセルにやってくれって言われたんだ）」

「（ああなるほどね）」

「ふつだが俺はその世界と決別する この敗北の先に勝利を得るために！」

「勝利・・・敗北・・・そこに意味はない・・・破壊するか作り出されるか・・・」

創造は破壊・・・破壊の創造・・・お前は箱舟と共に朽ちよ・・・」

『では対戦開始！』

アナウンスが響く

一夏は手筈ど通りにラウラに向かう

二人は空中でハイレベルな射撃戦が繰り広げられる

「寝言はそこまでだ!!！」

アクセルと俺は全く同時にブーストを掛け突撃し

地面はその衝撃で抉られる

お互いに組み合う

「舐めるな!!！パワーなら!!！」

ソウルゲインは更に力を増し押し始める

「押せ！アルト!!！」

スラスターを開きその勢いを使い押し返す

「なに！？ならば・・・青龍鱗！！！」

手にエネルギーをため放つが恭介はそれを逸早く察知し
後退しチェーングンを連射する

アクセルは上昇し回避をするが恭介は先回りしバンカーを構える
がアクセルは回転し腕を回転させ拳と拳がぶつかる

「おおおおお！！！！！！」

ラウラはチャンスだと思い恭介に向かうが

「おっと！お兄ちゃんの戦いに邪魔はさせないよ！」

「つち！では貴様から先に！！織斑 一夏！！！！」

「織斑？否、我は希望 一夏！！！」

再びハウリング・ランチャーを構え

片手にヴァイス専用日本刀を構える

「君なんて僕一人で事足りるんだよ！！！」

千冬サイド

私は最愛の兄であり誰よりも強く優しくかった恭兄と一夏の戦いを見
ている

が私の目はどうかしてしまったのか？

一夏は重力なんて完全無視しているような素早い動きでラウラを圧
倒している

速すぎる・・・イグニッション・ブースト瞬時加速を使用してもあそこまでの
速度は出せない・・・

恭兄はアルマーとハイレベルな格闘戦を繰り広げている

しかも互いにエネルギーを減らしていない・・・
一夏も同様だ

「す、すごい・・・」

隣の山田君は驚きの声を漏らしているエネルギーを減らしているのは
ラウラのみ

『『『ふふふ・・・』』』

するといきなり恭兄、一夏、アルマーが笑い始めた

『久しぶりに血が騒いできたなあ・・・ベーオウルフー!!』

ベーオウルフ？

恭兄の事か？

『そうだな、アクセル・アルマー・・・その名呼ばれるのは久しぶりだ・・・』

『お前もそうだろ？白き閃光よ？』

『二人は良いけどさ僕はテンション低めだよ、蒼き戦神』

『ふっ・・・赤い戦神殿はどうだ？』

『ああ・・・だが制限を付けたままだからな』

これで制限を付けているというのか!？

『これでえ!!!』

一夏の持っていた銃の銃身先端が変形し3本の口径の異なる砲身が
出現し

攻撃を放つ

それはラウラに命中した

『くっ……これで俺一人か……』

千冬サイドアウト

恭介サイド

俺はアクセルと向かい合っている
がいきなりラウラに変化が起きた

「おいー夏まだ終りそうにないぞ」
「みたいだね」

白き閃光の力

俺達の目の前でラウラのISは変化していた

ドロドロに解け全身装甲タイプに近いISと変化しているフルスキン

「これって形態移行フォームシフトじゃないね」

「ああまさかこんなイカサマカードを隠し持っていたはな」

そして剣を振るい攻撃してきた

俺はそれを斬艦刀で受け止める

「ってかあれ千冬ににてね〜か？」

アクセルが疑問に思う

確かにそうだ

攻撃パターン、武装、回避モーションパターンが千冬そのものだがラウラはアクセルにも攻撃をしてきた

「おいおい見境なしかよ？」

「そついいながら軽く避けるな」

「お兄ちゃん、あれの始末は僕が着ける」

「一夏」

「よくも・・・あんな奴の・・・」

一夏からは怒りが伝わってくる

「任せるアクセル異論は？」

「ない、俺は見物させてもらうぜ」

「夏は飛び上がりラウラに向かう」

「一夏の奴・・・大丈夫だろうな？」

「心配するな俺が特訓したんだ」

「あつそれなら大丈夫だな」

一夏サイド

・・・哀れだね・・・力を望んで手に入れたのが
ブリュンヒルデの力か・・・

「ねえ・・・君、力を望んだならなんで織斑　千冬の力なんて望んだのさ？」

ラウラは構わず切りかかってくるが日本刀で受け止める

「どうして自分自身力を引き出そうとしないのさ？」

何で自分で憧れの存在に近づこうとしないの？

君は僕と同じだね、僕も昔はお兄ちゃんに近づきたかった

それでお兄ちゃんの戦闘データをヴァイスにインプットして戦った

でも僕はボロ負けした理由なんて簡単だった

自分の力じゃなくてお兄ちゃんの力に頼ろうとしたから

その日から僕は自分の力を引き出す最大限に引き出す戦い方をする
ように

心がけたそれだけでお兄ちゃんと互角近くに戦えるようになった」

ラウラはまるでその話を聞いているかのように動かない

「・・・決める」

持っていた刀を居合い切りの要領でラウラを斬りつけ
ヴァイスのエネルギーを利用し一気にラウラのエネルギーをゼロに
した

僕はその時彼女の声が聞こえた気がした

なぜお前はそれほど強い？

「僕は強くないよ、未熟者さ」

未熟者だと？あれほど力を持ってきてもか？

「力っていうのはさ、人を守ったり目的を果たした時に価値がある
と思うんだ」

では・・・お前の目的は何だ？

「僕の目的はね、お兄ちゃんと肩を並べられるようになる事と
ある人達を倒す事だよでも今はお兄ちゃんとの生活と

友達を守る事かな？」

守る？

「うん、君も守るよ」

私はお前の友達ではない

「だったら今から友達だね」

その時には彼女の声は聞こえなくなっていた

「一夏よくやったな」

「あの居合い切りなかなかのものだったぞこれかな」

僕は彼女をお姫様抱っこした

「ラウラを医務室に連れて行こう」

「ああそれが一番だ」

「ああ、今回は一夏の一人勝ちだな」

僕達はISをか解除して医務室に向かった
医務室に彼女を寝かせた

「俺が見ているお前らは飯でもいって来い」

「僕はシャワーいって来るよ」

「俺は飯だ」

ー夏サイドアウト

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532x/>

IS インフィニット・ストラトス 織斑 一夏と千冬の兄

2011年10月28日18時10分発行